

「反 - 教養主義」的エリートとしての好事家

——昭和初期の会員制特殊風俗雑誌『変態・資料』の分析を通じて——

大尾 侑子

本稿は、昭和初期の会員制特殊風俗雑誌『変態・資料』の分析を行い、①「好事家」を自称した戦前期のエリート層に「反 - 教養主義」的エートスが観察しうることを、②そのエートスが「教養主義」の言説空間と会員雑誌という近代メディアによって担保されたことを明らかにした。彼らは教養主義的な価値体系を理解した上で、あえて「悪趣味 bad taste」なものを価値付け、知的対象に読み替えるという好事家特有の「領有 appropriation」を行った。そこで重宝した概念が〈変態〉である。この実践は、純粹文化に同化することで大衆から卓越化しようと企てた学歴エリート層に対する階級内卓越化のゲームであったと共に、「〈領有〉の共同体」としてコミュニティ意識を芽生えさせ、「会」の凝集性を強化するという帰結も招いた。

1 問題の所在

これまで「教養主義」研究は何を論じてきたのか。そこでは教養主義を象徴する素材や、主題に関する【内容】ばかりが取り沙汰され、教養主義という言説空間におけるゲームの【形式】は二の次にされてきたのではなかったか。「大衆」に対する階級間卓越化を企図する主体として教養主義的「エリート」が強調されるなか、エリート内部で繰り広げられていた卓越化の実践は看過されてきたと言って良い。この営みは、「教養書」や「総合雑誌」「岩波文庫」といった教養主義ゲームの主題や素材に拘泥しているだけでは見えてこない。「エリート」は別様にも存在していた。それはゲームの【形式】に照準することで浮かび上がってくる。

本稿はこの問題意識から、昭和初期の会員制特殊風俗雑誌の分析を行い「好事家」を自称した戦前期エリート層の「反 - 教養主義」的卓

越化の実践と、これを支えた社会的文脈について明らかにするものである。これまで戦前期の知的空間は、しばしば旧制高校を舞台とした学歴エリートの「岩波文化」（＝教養主義）と大衆の「講談社文化」（＝修養主義）という“二項図式的パラダイム”（佐藤 2002: 64）で把握されてきた¹。しかし、この図式は「エリート」の多様性を捨象し、その一面的な姿を強調するという問題も孕んでいたのではないか。そこで本稿は、「反 - 教養主義」的な立場を取ることによって権威主義的な教養主義者に対する卓越化を企てるという、一部のエリート層が繰り広げたゲームの【形式】に照準する。これは戦前期の「知」を巡るコミュニケーションを立体的に描き出す極めて社会的な試みと言える。

たとえば川端康成と共に第6次「新思潮」の同人を努めた今東光（1898-1977）が、著書『十二階崩壊』の中で打ち明けた想いは、従来の図式的理解がとりこぼした象徴的な「例外」

事例のひとつである。

その中で僕だけは『新思潮』とは水と油だったような気がして来たのだ。谷崎潤一郎を見ても、芥川龍之介を見ても、菊池寛を見ても、それは帝大卒というエリートの世界の住人で、僕には彼岸の人に思われるのだ。僕の文壇はもっと違った異人種も住めるもののような気がするのだ。それは永井荷風の伝統している江戸戯作者の途であって、それこそが僕の往くべき路のような気がするのだ、気が進まないのだ。(今 1978: 315-6)

こうした今の告白には、1920年代における「エリート」層内部の多様性が指し示されている。すなわち、①『新思潮』を担った「帝大卒というエリートの世界」と、②「永井荷風の伝統している江戸戯作者の途」である。江戸戯作とは、格式高い和漢文学に対してユーモアや人情味が溢れる江戸通俗小説に代表されるもので、今は「帝大卒エリート」に対して単なる「大衆的なもの」を対置せず、別の「路」を呈示した。

この今の語りにもどこか見覚えを感じるのは、戦後の吉本隆明による丸山眞男批判よろしく、同様の議論が繰り返されてきたからだろう。これは単なる個人批判ではなく、個人に仮託された「知識人的なもの」、ないし権威主義的な教養主義者に対してアンチテーゼを表明する【形式】的ゲームの系譜である。戦後反復されてきたこのゲームは、戦前期においては自明のものではなく、プチ・ブル階層が出現した1920年代においてはじめて成立しえた。本稿はこうした自明視されていた事象を問いなおす試みでもある。

〈『新思潮』の同人になれなくたって、文学は独りでやれるさ——〉。こう妓にむかって「怒

鳴りたくなった」(今 1978: 310) という今の葛藤は、教養主義の空間が生み出したものだ。この空間の暴力性は、菊池寛が言い放った「彼〔今東光〕は一高も帝大生でもない。ありゃ本郷の不良青年だよ。あんな奴を〔新思潮に〕入れることないじゃないか」(今 1978: 307) という言葉に代弁されている。中学中退の不良青年とはいえ、戦前期の文壇を彩った「エリート」の一人である今にとって、「僕の文壇」とは何を意味したのか。そして「もっと違った異人種」とは、当時のいかなる社会層であったか。

本稿は今が投げかけた上記の問いを引き受け、それを足掛かりとすることで、第一に戦前期エリートの「反・教養主義」的エートスを基盤とした卓越化の企てを、第二にその存立基盤としての社会的コンテクストを明らかにしたい。以下では、教養主義に関する先行研究のレビューを行ったうえで、戦前期の「好事家」層の位置づけを述べ(2章)、彼らの営みに雑誌メディアが不可欠であったことを確認したのち分析対象と枠組みを示す(3章)。その後、雑誌『変態・資料』の誌面を「〈領有〉の共同体」というアプローチから分析する(4章)。

2 先行研究と本稿の立場

2-1 戦前期の「教養」と読書空間

「反・教養主義」のエートスを論じるために、この節ではその下地として戦前期の教養主義空間に関する先行研究を整理する。まず、代表的なものに竹内洋の教養主義研究がある。竹内は「教養主義の文化エージェントは、なんといても岩波文庫をはじめとする学術・教養出版をおこなった岩波書店」(竹内 2003: 132) だとし、高等教育を受けた学歴エリートが正統な文化に同化することで非学歴エリートから「卓越

化 distinction」を図ったことを論じている。

竹内（1997, 2003）の立場は、ブルデューの階級再生産の議論に基づいて、教養主義空間を教養を掛金とした「界 champ」として把握する点が特徴であり²、それは明治以降の「立身出世（＝階級の上昇）」の流れを汲んで、学歴上昇運動のルートに乗ることができた旧制高校青年の間で開花したという（竹内 1997）。この「立身出世」については「近代日本の立身出世主義の底辺を構成するもの」（見田 [1967]2012: 186）として〈金次郎主義〉に注目した見田宗介（1967）が詳細に論じている。立身出世主義はその後、刻苦勉強により人格の完成を目指す「大衆」の修養主義へと流れたとされるが、「エリート」の教養主義も、この修養主義における人格主義に基礎付けられていた（筒井 1995; 北村 1999; 長谷川 2003）。にもかかわらず、学歴エリートの「教養主義（岩波文化）」に対して、エリートの「外」から、大衆の「講談社文化」が対置させられてきたのである。

しかし、エリートのエートスを物語るはずの「教養主義」の様相は、今東光の「路」とは明らかに性質が異なっている。これは「教養主義」と括られてきた「エリート」の内部でも多様性や対立構造があったことを示している。ならば、戦前期の知的空間を「エリート」対「大衆」という[ウチ/ソト]の対立として描いてきた従来の図式的理解にくわえて、それでは捉えきれない「エリート」内部（＝[ウチ]）の差異や抗争についても同様に焦点化する必要があるのではないか。先行研究はこの課題に積極的に取り組んできたとは言えない。

もちろん中には、大衆雑誌『キング』の分析によって「岩波文化」対「講談社文化」図式を覆してみせた佐藤卓己（2002）や、佐藤も触

れている村上一郎（1982）の議論など優れた先行研究がある³。これらは「人を教育する文化」というメディア特性から「岩波文化」と「講談社文化」の同質性を指摘するものであり、宮武外骨など「人を教育しない文化」を両者に対置させている。つまり、これらは〈教化型/非-教化型メディア〉というメディアの【内容】に照準した分析と言える。

こうした先行研究と本稿の立場の差異は、本稿が「エリート」層の実践（【形式】）に着目した分析を行う点にある。これは「エリート」が相対的劣位の「大衆」という「階層」に対して行った卓越化（＝階級間卓越化）に注目した従来の研究に対して、「エリート」内部の卓越化実践（＝階級内卓越化）に主眼をおく⁴。以下で明らかにするように、本稿は今が「新思潮的なもの」に代弁させた「学歴エリート」に対して単なる〈オルタナティブ・エリート〉の存在を指摘することには関心がない。同様に〈非-教化型メディア〉の存在を指摘することも目的ではない。教養主義の言説空間の反措定としてのみ自らの立場を主張しえた〈オルタナティブ・エリート〉の形式的なゲームに照準することで、そこから逆照射的に1920年代の知的空間を把握することを目指している。

2-2 好事家という社会層

こうした問題意識にもとづき、本稿は「好事家」というカテゴリーに着目する。これは分析のカテゴリーであると同時に、当事者たちが自らを自称する際に用いた語彙であるという点で当事者カテゴリーでもある。では、教養主義が支配的であった社会で「好事家」はどのような存在であったか。これを知るうえで、芥川龍之介のエートスについて論じた高橋奈保子の指摘は示唆に富んでいる。高橋（2006）は「当時

の知的エリートとしてのエートスとして、文人趣味を含め、修養のための稽古ごとや道楽としての「趣味」を、精神文化としての芸術と比べ、一段低い中間文化として位置づける大正教養主義の価値軸があった」（高橋 2006: 70）とし、芥川が教養主義における内省と人格形成のための芸術観に満足していなかったことを論じた。

「修養のための稽古ごと」を大衆の修養主義として「嗤う」大正教養主義の価値観は先行研究が論じた通りだが、もう一つ劣位のものとして位置づけられているのが「道楽としての『趣味』」、つまり hobby である。本稿が扱う戦前期の「好事家」は、この「道楽としての『趣味』」に傾倒した層であり、大正教養主義の風潮においては「大衆」と同列のものとして相対的劣位に置かれていた。こうした優劣を担保したもののこそ、精神文化としての芸術（＝「良い趣味 tasteful」）を価値づける教養主義の評価軸であり、その価値を理解しうる審美眼の保有者（＝エリート）であった。

しかし以下で明らかにするように、エリート層の中には、あえて「悪趣味 bad taste」なものを価値づけることで教養主義のオーソドキシシーを価値転倒させ、自らを偽悪的に「好事家」と呼ぶことで卓越化を企てた〈オルタナティブ・エリート〉が存在した。結論を先取りすれば、「好事家」層は学歴エリートが純粹趣味に同化することで非学歴エリートを「嗤う」という教養主義空間の風潮自体を「嗤った」のである。こうした営みは教養主義の価値体系を解した上で、bad taste を anti-taste として読替えていこうとするエリートの「役割距離 role distance」（Goffman 1961=1985）的振舞いとして理解できよう。

本稿は「好事家」の中でも〈変態〉概念を手段主義的に利用した集団を焦点化する。なぜ〈変

態〉なのか。当初〈変態〉概念は「異／奇なるもの」を象徴する部門として、[非 - 正常]を意味していたが（秋田 1994; 菅野 2003, 2004; 和田 2006 ほか）、昭和初期に至ると病的性欲を表す「変態性欲」概念へと収斂していった⁵。〈変態〉を価値付けることは、そのままアンチ・オーソドキシシー（「反 - 教養主義」）のポジションを取ることができるために、卓越化を企図する好事家にとって実に利便性の高い語彙だったのである。このように、メンバー間で価値体系の共有が求められる特殊な集団にとって、コミュニケーションの前提となる評価軸を共有する「場」が不可欠だったことは明白である。では、その場とは何が担ったのか。それは雑誌メディアであった。

3 対象と方法

3-1 好事家と近代メディア

この節では、①戦前期の「好事家」の営みと雑誌メディアが切っても切れない関係にあったこと示したうえで、②本稿の分析対象である会員制特殊風俗雑誌のメディア史的な位置を確認する。まず、ある集団が共通の価値体系にもとづいて対象を蒐集し、評価しあうことで共同性を確認するとき、前提として評価軸の共有が求められる。戦前期の好事家にその「場」を提供したのは、会員誌をはじめとする雑誌メディアであった。

たとえば、明治 20 年代後半から東京を中心に登場した朝顔雑誌を分析した丸山宏（1994）は、変化朝顔の好事家が集う朝顔会が雑誌を通じて情報交換の場を作り、会員を集めたことを論じている。朝顔会は「華族、旧幕臣、学者、平民あるいは植木商等、様々な人々から」なる「社会的階層を超えた趣味人の会」（丸山 1994:

33) であり、かれらが劣性遺伝によって変形した変化朝顔を愛好した背景には、奇花、珍花、斑入りなどの園芸種に「粹」を見出した江戸の奇品趣味的園芸文化への憧憬という好事家の嗜好があった(丸山 1994: 36)。

これは、前節で述べたように「良い趣味 tasteful」⁶を解するエリート層の中で、その価値体系を「道楽としての『趣味』」を通じて“ずらす”というゲームが成立していたことを示す事例である。朝顔会の場合は「アンチ・正統趣味(=「奇品趣味」)」へと傾倒することが「粹」への憧憬を抱く「好事家たるもの」として、自らを積極的に規定していく手段となった。こうした特殊な価値観を共有し自身を「好事家」としてカテゴリー化する技法として、読解の作法を可視化し、メンバーの交流を確保した(会員)雑誌は大きな役割を果たしたのである。それは〈変態〉(=「非 - 正統」趣味)に着目した好事家にとっても同様であった。変形朝顔を愛でた好事家にとっての朝顔雑誌は、〈変態〉を積極的に利用し、教養主義的な価値に対するアンチテーゼを表明した好事家にとって何であったのか。そこで、本稿は「文芸資料研究会」が頒布⁷した雑誌『変態・資料』(1926-1928)に焦点を当てる。これは会員制特殊風俗雑誌として発禁対象になった非公開雑誌⁸であり、1929(昭和4)年から1932(昭和7)年にかけてブームとなった「エロ・グロ・ナンセンス」の前史として位置づけられる。

3-2 分析方法

以上を踏まえて、本稿は『変態・資料』の中からオーソドキシの価値転倒が観察しうるテキストを抽出し、その内容の分析を行う。そこで依拠するのは、ロジェ・シャルチエが読者共同体のテキスト解釈⁹について用いた「領有」

概念である。「領有」概念とはシャルチエがミシェル・ド・セルトーから影響を受けた¹⁰もので、テキストの作り手の意図にかかわらず読者が利害や癖、習慣行動などにもとづく主体的な働きかけによってテキストを受容する営みを指す(Chartier[1997=2000], シャルチエ 1992 ほか)。読者はテキスト解釈を通じて「自己を理解し、『現実』を構築する媒介」(Chartier [1997=2000]: 395)としてそれを利用するとシャルチエは論じた。

対象の価値を教養主義の価値体系から別の評価軸によって“読替え”、オーソドキシの価値転倒を生じさせる「好事家」の読解は、まさに対象を「領有」する営みと捉えてよいだろう。戦前期の公刊雑誌の場合、投稿欄・投書欄という場に生起する読者同士の交流や質疑応答、文体について論じた読者共同体分析は多く存在する¹¹が、一般的に発禁処分と隣り合わせであった戦前の特殊風俗雑誌は、投稿欄や投書欄などが少ない傾向にあり、投稿欄コミュニケーションを利用した読者共同体研究が行いづらかった。

『変態・資料』に関する先行研究でも菅野聡美(2005)や秋田昌美(1994)、島村輝(2006)など優れた研究があるが、いずれもテキストに表出した「好事家」のエートスや同人と会員読者の間のコミュニケーションについては論じていない。また、会員制雑誌の「秘密結社」的側面を指摘した城市郎・米沢嘉博(1999, 2001, 2002)や、梅原正紀(1978)など「会」の凝集性を強調したものもあるが、テキストの詳細な分析は行っておらず発禁本研究や人物交流史に留まっている。

他方で本稿のアプローチは、共通の価値やコードを利用して——意識的に——オーソドキシの価値転倒を試みるという【解釈や読解

の作法（形式）の共通性】に照準するという点で、便宜的に「〈領有〉の共同体 community of appropriation」¹² 分析と呼んでおこう。以下の分析では、利害関係や慣習、エートスを共有し、教養主義的エリートに対して卓越化を企てるために領有を行った好事家集団の存在を示すべく、誌面に現れる「〈領有〉の共同体」を明らかにする。

4 分析

4-1 〈変態〉と会員制特殊風俗雑誌

竹内（2003）は教養主義の分析の中で「人々は、総合雑誌をつうじて教養主義者になったが、同時に総合雑誌の購読によって教養共同体を形成していたのである。総合雑誌に掲載された論文やエッセイはしばしば学生間の話の糧になったからである」（竹内 2003: 19）と論じている。これに対して特殊風俗雑誌の場合は、その誌面に掲載された文献やエッセイが好事家ネットワークの糧となり、「好事家」として彼らのアイデンティティと共同体を形成したと言いつけられる。この節では、具体的なテキストを分析するにあたって会員制特集風俗雑誌というメディアの位置について論じる。なぜならば、このメディアの特性自体が、領有の実践の一端を担っていたからである。まずは刊行広告に掲載された一文を見てみよう。

【引用①】

徒らに声を大にして、内容以上に価値づけやうと骨を折ることは、馬鹿気た沙汰です。蟲の好いた人だけに頒ければいいんです。而かも其の蟲の好いた人でも五百名以上は絶対に困るんです。だから(…)本統[ママ]の人格者だけに譲りたいのです。大正

十五年四月文芸資料研究会一同（『変態・資料』1926年5月号広告より〔以下『変態・資料』は MATERIA QURIOSA →「MQ.1926.5」と表記し、引用箇所には【引用】と明記〕）

これは、さまざまな対象に〈変態〉を冠した叢書『変態十二史』シリーズの刊行に際して打たれた広告の一文、「変態本刊行の原因及びその目的」である。ここで注目すべきは、「内容以上に価値づけやうと骨を折ること」と「〔蟲の好いた人であろうと〕五百名以上は絶対に困る」という言い回しである。虚栄心の現れた低級出版物と量産体制に対する拒絶反応は、一体何を意味しているのか。それは1920年代の読書空間というコンテクストを踏まえると見えてくる。前者は、内容以上の価値付けを行う「総合雑誌」、とりわけ『文藝春秋』に対するアンチテーゼを意味し¹³、後者は関東大震災以降の大量生産、大量流通の出版資本主義に対するアンチテーゼを意味していると考えられる。つまり、「内容（に反した出版の姿勢）」と「流通システム」への二段階のアンチテーゼが表明されているのだ。「会員内頒布」というニュー・メディア自体が、内容と流通形態の双方から出版資本主義が加速する読書空間を価値転倒させる「メッセージ」だったのである。

この『十二史』を出版したのは、プロレタリア文芸雑誌『文芸市場』を出版していた一派からなる「文芸資料研究会」で、中心人物は梅原北明¹⁴というエログロ出版のオルガナイザーであった。『十二史』シリーズは〈変態〉の新規性や煽情性が受けて大ヒットを記録したが、「人情」や「広告」「敵討ち」「商売往来」など多岐に渡る対象に〈変態〉を見出したために、内実はこじつけの側面が大きかった。ただし、ここで重要なのは、変態が指す【内容】ではな

く、〈変態〉概念を媒介として正統アカデミズムが取りこぼした「知」を救い上げるという遊戯の空間が成立していたことである。

この『十二史』の好調を機に、文芸資料研究会は1926年9月15日から会員制雑誌『変態・資料』の頒布を開始した。『変態・資料』は、その名の通り〈変態〉的な文献、写真、図画、エッセーなどの「資料」を蒐集した雑誌であり、自ら「好事家」や「珍書愛好家」「探奇派」を名乗る集団が集い、誌上の好事家共同体を形成していった。

この雑誌は、会員制という流通システムを〈変態〉や獵奇、エロやグロといった「特殊風俗」の領域に利用した先駆だが、こうした流通形態と素材の結合は、既述のように1920年代の読書空間がはじめて可能にしたものである。1926（昭和1）11月に企画を発表し、翌12月に始まった円本ブームが「読書の大衆化装置」（永嶺2001: 131）として機能したように、1920年代は読書の大衆化の時代である。円本以前からあった予約制出版という制度を利用して、一冊ごとの分売不可、前金予約制によって成功した円本だが、これは大手出版社の市場寡占と小粒の出版社の経営難をもたらし、その打開策として読者を煽る獵奇や性を扱った出版物と発禁本の増加を招いた¹⁵。こうした状況で「公刊本では許されない性文献の復刻や研究、性の手記などの生の資料は、研究者だけでなく、より刺激的な内容を求める好事家たちにも欲されていた」（城・米沢2001: 31）。この時局をとらえて成功したのが会員制特殊風俗雑誌である。

たとえば「鎖陰の事」というタイトルで「生れ乍らに陰門の塞がり居るもの」を〈変態〉として論じている奉天満州医大教授の長谷川健太郎は、「自分は茲に、聊か乍らそれを列

べ、此途趣味家の参考に供したく思ふ」（MQ. 1927,10: 60）と記しており、受け手として「趣味家」が想定されていたことが確認できる。このように医学博士の投稿記事¹⁶も多かった「特殊風俗誌は、性科学誌の羊頭狗肉な生ぬるさを払拭し、好事家や愛書家たちに新たな面白さを教えた」のである。「それは危険と隣り合わせの禁断の快楽であり、北明のハッタリのきいた反体制的言動も含めて結社的要素も強」（米沢・城2001: 32）く、創刊号から約1年で全国700名余りの会員数を獲得した¹⁷。

H・ガーフィンケルは「話すこと自体が、“ある状況について話すのに使われており、しかも当の状況を構成する一つの特徴”なのだ」（Garfinkel 1974=1978: 16）と述べたが、これに則れば『変態・資料』は好事家たちが「〈変態〉について語ること」と同時に「〈変態〉を構成すること」を共に実現するメディアであったと言える。したがって、誌面をみれば「何が〈変態〉として語られ、構成されているか」を知ることができるが、より重要なのはその語りを可能にした価値体系だ。それこそが、教養主義空間において「正統」とされる文化や「良い趣味 tasteful」へのアンチテーゼだったのである。「教養主義的なもの」の否定という形式において、かれらは〈変態〉をカテゴリー化し、自らを好事家としてキャラクタライズできたのだ。

4-2 「領有」の実践 —① “価値転倒”の試み

では具体的に『変態・資料』の誌面にはどういった「領有」の実践が観察できるのか。まずは、教養主義的な価値観において劣位のものとしてされている対象に「知」を読み込んでいく様子を確認しよう。たとえば「明治文化研究会」メンバーで戦前期のコレクターとして著名な齋

藤昌三は、「肉袋の袋に現れた世相（ルーデサックの歴史）」というエッセーの中で、震災前年に亡くなった狂信的なコンドーム（ルーデサック）蒐集家を紹介し、「この話が震災後の無一文になった変態趣味家の間でよく噂に上がった」（MQ.1927,9: 94）と記している。死亡した男性が蒐集していたコンドームの袋は回り回って齋藤の元に渡ったという。

【引用②】

単なる性欲袋のその保護袋と笑つてはいけない。こんな物にも統一的に見れば変遷もあり進歩もあり、社会の流行も判り、袋の一枚によつても当時の世相を窺ひ知る貴重な文献ともなる。（MQ.1927,9: 95）

齋藤の記述で興味深いのは、第一に震災以前の趣味人が震災後「変態趣味家」の間で注目されたという点である。齋藤の語りは「趣味家」集団に〈変態〉というカテゴリーが自然に適応されうるものであり、かつ〈変態〉的なものを愛好する一定の層がいたことを示している。第二に、齋藤自身が「単なる性欲袋のその保護袋」を「世相を窺ひ知る貴重な文献」、つまり読解すべき「テキスト（＝〈変態〉資料）」と位置づけている点だ。これは教養主義的価値体系からは等閑視されるであろう対象を、数少ない先行文献を参照しながら「知」の対象として読み替える「領有」である。もちろん、ここには知的対象の読解を通じて人を「教化」しようとか、人格の完成を目指そうなどという姿勢は一切ない。価値転倒を企図した読替え自体が目的化した形式的な遊戯なのである。

齋藤は「コンドームの袋」を「〈変態〉-資料」にカテゴリー化したのが、誌面ではほかにいかなる対象が〈変態〉として語られ、〈変態な

るもの〉を構成していったのだろうか。「領有」の資源として利用されたのは次のようなものであった。

【目次例】「伝説から観た狼の性欲／狐と人間の交媾伝説」（藤沢衛彦）、「社会闘争としての切支丹の迫害と殉教」（武藤直治）、「文学に現れたる妖怪」（井東憲）、「食人風俗考」（酒井潔）、「刀剣に顕はれたる春的小道具」（室津鯨太郎）、「日本古典に顕はれたる滑稽文学」（生方敏郎）、「古代東洋性欲教科書」（酒井潔）、「詩歌俗謡に現はれたる性交礼讃」（佐藤紅霞）、「明治、新聞雑誌資料、並筆禍文献」（梅原北明）、「変態薬劑 朝鮮人参」（今村螺炎）、「江戸町奉公支配考」（梅原北明）、「接吻と蠱毒」（羽太鋭治）、「自殺考」（中井喜八）、「印度愛欲文献に於ける『爪痕』『齧痕』」（古泉展也）、「龍及び正月に於ける性的縁起並びに其玩具」（梳弄堂山人）、「黄表紙系の合本」（尾崎久彌）、「猫の性的生活」（河村目呂二）

以上ごく一部からでも〈変態〉にはかなりのヴァリエーションがあったことが分かる。なぜならば、好事家が〈変態〉という対象自体へ固執していたわけではなく、それをアンチ・オーソドキシイという立場を取るための資源として利用していたからである。〈変態〉は権威主義的な教養主義者を「嗤う」ためのツールでしかなく、知的なゲームを担保するための免罪符でしかなかったのだ。これは「時折諸君のなかから吃驚するような手紙がきて困る、事務所の私まで変態だと思はれては迷惑だ。（…）我々は変態資料研究会をもつたところで、我々自身まで変態になったら会員諸君は困りませんか」（MQ.1926,10: 101）という誌面からも窺える。また〈変態〉カテゴリーには江戸戯作への憧憬

が色濃く現れ、「黄表紙」に象徴される「しゃれ／風刺」への傾倒がみてとれる。

このようにさまざまな対象を〈変態〉にカテゴリー化し知的対象として「発見」していく実践は「反 - 教養主義」という【形式】の戯れであり、たとえば好色文学として出版検閲の代名詞となった『ファニー・ヒル』への評価にも顕著であった。

【引用③】

次に本年最終の番外出版として軟派文献ファンニー、ヒルを出す。これは近日中に内容見本を送るが、素晴らしい秘本である。識者は云ふであろう「淫本也」と。が、附録「十八世紀ロンドン遊里考」は売女生活の赤裸裸たる歴史的記録でらうこと言を俟たぬ。(MQ.1926,12:「編集後記」)

ここでも[識者 - 淫本]対[吾々 - 秘本(= 歴史的記録)]という対立図式が用いられ、世間で「識者」とされている者の評価軸を価値転倒させている。こうした傾向は、『変態・資料』創刊号の時点から雑誌のカラーとして強く押し出されていた。「でかめろん・ふせ字考」と銘打たれた記事では、[公権力]と[同人 - 会員読者]の価値体系の差異を明らかにしている。

【引用④】

今のお役人様方に、西鶴ものが頭から淫本と断定を下されて了つてみると同様に、ボツカチヨのデカメロンと云へば、これ又、あたまから淫本と決定されて了つてゐる。これは、お天氣の具合で米の相場が変動するより、もつとあやふやな断定である。つまり世間の噂に根本をおいた検閲で、実際の鑑賞眼から割り出された風俗壊乱ではなさそうだ。(MQ.

1926,9 創刊号: 64)

風俗壊乱という評価に対して、それが「世間の噂=あやふや」に依拠しており「実際の鑑賞眼」ではないと示すことで「正統」の評価軸(=「世間の噂」)を劣位に置いている。これは「同じ閨中の秘事を描くにしても、西鶴ものやデカメロンは極めて簡単に、而も巧みにあつさりと逃げてゐる。淫本には此の上品さが全くない。(…)西鶴ものやデカメロンには、其の醜悪さがない」と続けられ、世間が否定する対象に「上品」で「醜悪さがない」という逆転した評価を与える「領有」の実践である。

こうした評価は、単に雑誌同人の独断として呈示されるのではなく、「われわれ」(=[同人 - 会員読者])の価値体系として巧みに示されることで、好事家にあるべき「審美眼」を会員読者と共有する機能も果たしていた。「西鶴」に関しては今東光も前掲著で次のように述べている。

西鶴の帝国文庫本の「好色一代男」や「好色一代女」など逸早く発売禁止になり、僕ら〔谷崎潤一郎と今〕は密かに写筆本によって渴を癒や〔ママ〕したものだ。(…)伏せ字の無い西鶴作品に興奮したのだ。興奮したというのは好色本だから性的に興奮したというのではなく、国禁の書を読むという事実に興奮したのだ。(今 1978: 19)

ここで今が「好色本だから」(【内容】)ではなく、「国禁の書を読む事実」(【形式】)に興奮したと述べている点は重要である。ここからは今の好事家の嗜好だけでなく、「国禁」自体にフェティッシュな価値を見出し得た当時の社会状況を窺い知ることができるからだ。そして今

は次のように続ける。

元禄時代に使われた好色という二文字は性的な意味より、当世風乃至は時世粧というぐらゐの意味だった(…)この単純な風俗小説がどうして明治時代に発売禁止になったか理解に苦しんだ。果たして西鶴本は卑猥か。猥褻なるが故に世上に流布するのを禁ずるといふのか。然らば猥褻の反対は何であるか。僕等は仲間内で西鶴写本を廻して、縷々、討論したもんだが、どうしても西鶴が卑猥だといふところに到達しない。(今 1978: 19)

ここで今が依拠するのは、[江戸(元禄) - 好色 - 単純な時代小説]に対して[明治時代 - 卑猥 - 発売禁止]という凶式である。これは明治の啓蒙主義的な価値観に対する疑義と、それを「討論した/僕ら」は、西鶴の真価を理解する「反 - 教養主義」的な「教養」の保有者であることが表明されている。この傾向は次の箇所からも窺える。

フックスを見せられても、それが中世の好色画であるとか、レンブラントの春画であるとかを一見して指摘するのではなければ、芥川龍之介に馬鹿な助平野郎呼ばわりされる(…)少なくとも谷崎や芥川に近づく人々は、普通の文科出身の文学青年では齒も立たなかった。(今 1978: 285)

「教養」がなく「エロ」と読解するものは「助平野郎」で、背景知識をもって対象の芸術的価値を理解しうる「教養」ある者だけが、「谷崎や芥川」に相手にされる。まさに「教養」を掛金とした「分かる人にだけ分かる」遊戯である。前掲の「でかめろん・ふせ字考」も今東光と同

様の見解を述べている。次の引用は、今の「僕ら/仲間内」と『変態・資料』における「吾々/読者諸氏」との評価軸が共通していることが分かる箇所だ。

【引用⑤】

これは少々猛烈である。が、これとて普通の淫本と対比させられては堪らない。お話にならぬ程気高さを持つてゐるぢやありませんか。(…)この程度の描出が淫猥であるや否やに就いては、読者諸君の御賢察に任せます。斯くの如き程度のものが淫本なら、古事記にも、源氏物語も、等々も同様に淫本でなければならぬ。(MQ.1926,9: 69)

「少々猛烈」な対象に「気高さ」を読み取ることができるか否かは、「読者諸君の御賢察」に任せる。こうした高踏的な態度は、「われわれ」の「反 - 教養主義的 - 教養 (=御賢察)」が「お役人様方」的な価値体系に対して卓越したものであることの表明である。

4-3 「〈領有〉の共同体」—②「公権力」との戯れ

以上のように「われわれ」と正統的価値を象徴する「公権力」との対立凶式をことさらに強調することができたのは、他ならぬ「発禁」という烙印が両者の差異を客観的に保証したからである。たとえば1926年12月号の「必読後記」でも「吾々の認識」と「役所の見解」を対立させるために、「発禁」を上手く利用している。

【引用⑥】

前号の特大号発売禁止。別に事改まつて珍しく報告する程の事もなし。役所の見解と吾々の認識とに可成りの距離がある。その距

離が発禁段階なのである。敢て恐れる程のことでもなし。吾々の税金で官吏は養はれてゐる。(MQ.1926,12:「必読後記」)

この両者の認識の差異、つまり「役所(オーソドキシ)の見解」と「吾々の認識」の間に「可成りの距離がある」ことこそが、「反 - 教養主義」的な好事家のアイデンティティをそのまま保証していたのである。同時に「その距離が発禁段階」であるという自己理解からは、一般的には“負の烙印”である「発禁」が「吾々」の特性を示す指標へと価値転倒していることも読み取れる。だからこそ「別に事改まつて珍しく報告する程の事もなし」なのだ。もちろん、稀少価値の高い「国禁の書」をフェティッシュとして愛でる好事家の心性を踏まえれば、自分たちの出版物が「国禁」と認められることは一種の社会的な承認でもあっただろう。

こうしたエリート内部の階級内的卓越化ゲームは、「われわれ」を偽悪的な立場に置くことで正統的なものを滑稽化する戯れのゲームでもあった。この戯れ自体が所謂「グロ趣味」「滑稽趣味」「怪奇趣味」といった hobby と不可分であったために、〈変態〉的読解作業(=領有)を「道楽」とする好事家ネットワークも形成されやすかったのである。たとえば「必読後記」でも、自分たちの振舞いが「公権力」への“真面目”な闘争ではなく一種のユーモアを基調とした“戯れ”であることが強調されている。

【引用⑦】

総理大臣もヘコヘコする日本一の大元老西園寺さんは、あの歳で愛妾花ちやんに快樂の遺物を生ませた。そして大に世の愚民どもに快樂至上の模範を示した。が、別に其筋は、彼を風俗壊乱罪に問はなかつた。

(…)これは誠に結構な世の中、僕も大に見習ひたくぞ思う哉(…)禁止糞喰へだ。公案を害す害さぬは会員諸氏の多数が決定する。(MQ.1926,12:「必読後記」)

公権力の象徴として西園寺公望をもちだし「誠に結構な世の中、僕も大に見習ひたくぞ思う哉」と風刺していることから、単なる反権力的闘争志向でも趣味人の交流志向でもなく、「反 - 教養主義」的な戯れのゲームが繰り返られていたことが分かる。同様の表明は、たとえば「筆禍記念号に題す」と題された記事にも色濃く現れていた。

【引用⑧】

たとへ内務省がどう云はうと警視庁が圧迫しやうと、今度からは当方にも陣容を整へて合法的に喧嘩を始める決心で、茲暫くの間、おひやらかしてやるつもりです。(…)感情で禁止にしる!感情で [注:空欄部は原文ママ]にしてやる。何云つてやアがるんだい?と云ひたくなります。扱て諸君よ。(…)対岸の火事見物の気持ちでゐて下さい。(MQ.1927,3:13)

ここでは「感情で禁止」にする公権力に対して、「おひやらかす」という表現が採用されている。また次に挙げる「警視庁の仰せを伝へます」という記事では、[会員読者 - 拍手喝采賞賛の声]対[お上のお役人一叱る]という二項図式が用いられている。

【引用⑨】

つまり、読者諸氏の方で、珍本々々秘中の秘、と拍手喝采賞賛の聲の高いものほど、お上のお役人から叱られる熱が高くなるのです

な。どうもやりきれませんや。両方にええことはないもんですな。(MQ.1927.3:146)

以上、【引用】④、⑥、⑧、⑨などに見られる諧謔的な姿勢からも分かるように、「発禁」という事実は“真面目”に対峙すべきものではなく、むしろ好事家コミュニティの凝集性を高める“戯れ”の資源として利用されたと考えるのが妥当である。「公権力ー感情的振舞」という図式を強調している点も、「感情」に対して自らを卓越した位置に置く意図が観察できる。

4-4 「〈領有〉の共同体」—③卓越性を担保する演出

ここまで一般的には「正統」とされている評価軸を価値転倒させるような「領有」の実践を明らかにしてきた。この節では、こうした“ずらし”の実践が前提として教養主義の価値体系における「正統文化(良い趣味)」を理解しているというパフォーマンスによって、初めて卓越化の機能を果たすということを確認する。

朝顔会を例にとると、一般的に美しいとされる優性朝顔の価値を解していなければ「あえて劣性の変形朝顔を評価する」という「粋」のゲームは成立しない。かれらの立場は教養主義の反措定として保証されたために、存立基盤としての「教養主義的なもの」を呼び出す必要があった。したがって、誌面に「丸善」や「外国書籍」「翻訳」という言葉が登場するのは決して偶然ではないのである。たとえば「外国書籍取次の試」と題された次のパフォーマンスは代表的だ。

【引用⑩】

稀本カタログか何かを見て、これは是非ほしいと早速丸善へ行つて御らんない。屹

度内務省の許可を得ねば注文出来ませんと澄した顔で断はられます。諸君、経験があるでしやう。此のイマイマしさを繰り返すまい繰り返すまいと骨折つた御蔭で、私達丈でどうなり手に入れ得る様になりました。(…) 注意 丸善等で取り寄せてくれる様な本は全然取り扱ひませんから承知置き下さい。(MQ.1926,12:50)

ここで殊更に「丸善で取寄せてくれる様な本」を揶揄しているのは、好事家が「丸善」を、まさに教養主義ないし正統趣味の象徴として扱っていたためである¹⁸。それは、梶井基次郎(1901-1932)が『檸檬』の中で「丸善の棚へ黄金色に輝く恐ろしい爆弾を仕掛けて来た奇怪な悪漢が私で、もう十分後にはあの丸善が美術の棚を中心として大爆発するのだったらどんなにおもしろいだろう」と描いたことを思い起こせばよい。基次郎のみならず、大正教養主義の成立に大きな影響を与えた夏目漱石(1867-1916)の『こころ』、芥川龍之介(1892-1927)の『歯車』でも「丸善」は象徴的な意味を与えられている。さらに同12月号では「佛語講座開始」と触れ込まれ、「近頃吾々同人間で佐藤紅霞君を引つ張り出して佛語の勉強を初めやうと云ふ特殊な心掛けが友禅と持ち上がつてきたこと、そして「東京市中在住の暇のある勉強家の一部に公開」しよう」と記されている点も見過ごせない。

このように〈オルタナティブ・エリート〉としての好事家は、自らが教養主義の価値体系を理解しているということを示すべく、教養主義の象徴的な語彙を意識的に強調し、利用した。同様の機能を果たしたものに、会員読者に所謂「学歴エリート」や「公権力」を象徴する人間がいることを示すパフォーマンスがある。

【引用①】

さて会員諸氏よ、と斯う呼びかけたところで、文学博士が二十幾名、医学博士が九十幾名、法学博士が十一二名と、云ふ風に偉い方々ばかりのお集りなんで御座いますから何とも早や恐れ多いことで御座います。(…) 今月はね、何しろ暑中のことで、同人が皆サボをきめ込み、同人もかうにんもなりませんだ。まア気長に怒らずに見て下さい不満な人はいつでもやめて欲しい。媚を売だけの慾もなし、暇もなしです。(MQ.1926,9: 118)

ここでは「偉い方々」が大勢いること、そして「不満な人はいつでもやめて欲しい。媚を売だけの慾もなし、暇もなし」だという高圧的な姿勢を強調している。このテキストが掲載されたのは創刊号であることから、当初からエリート主義的な色を打ち出していたことが窺える。ただ、ここでは記された職種の真偽よりも「偉い方々」を恣意的に列挙することのパフォーマティブな機能に注目したい。

既述のとおり「反 - 教養主義」的ゲームを成立させるためには、教養主義的価値体系へ精通していることが求められた。そこで同人は、てっとり早い手法として正統アカデミズムの人間が「会」に参入していることを喧伝したのである。それは「個人その個人が担っていると想定される役割との間のこの『効果的に』表現されている鋭い乖離」(Goffman [1961=1985]: 115)を演出するものであり、「反 - 教養主義」的立場を明確にするための必要悪として機能した。よって、反権威主義を正当化するべく権威を呼び込んでしまったという単なる自縄自縛の表れだと切り捨ててはならない。これを踏まえれば、次のような箇所にも納得がいく。

次の【引用】②と③は、会員読者の中に「五爵」「衆議院議員」「博士」「新聞記者」「判検事」「裁判長」がいることを示している。

【引用②】

実はこの間、華族会館に遊びにみつたら会館の図書室に、変態資料が備えてあるんだ。夢中になつて読んでみると、君が発行人ぢやないかと、会館の常連T公爵やK子爵やU男爵が会員であるあら、その辺から這入りこんでゐるらしい。(MQ.1927,1: 126)

【引用③】

所で読者諸氏に一寸(勿論。[ママ]之は読者諸氏中の公爵伯子男爵や貴族院衆議院議員や博士や新聞記者諸氏や判検事氏や裁判長閣下に申上るのではありません。)(MQ.1927.3: 147)

②、③のように、対立するはずの「教養主義」的な(というのは現世の立身出世ルートに見事に乗ったという意味での)「権威」が身内にいると示すことは、「会」のメンバーが教養主義的価値体系を理解しうるエリートであるということを示唆している。それに加えて、教養ある芥川・谷崎にとってフックスの画集が「芸術」であるように、列挙されたエリート達にとって『変態・資料』は「エロ」ではなく「資料/文献」であることも含意されている。つまり『変態・資料』には、同人がさまざまな〈変態〉を価値づけて「領有」する実践が現れていると同時に、この雑誌自体を「知」的対象として「領有」させるような仕掛けも盛り込まれていたと考えられる。

実際、同人自身も文筆業や新聞記者、小説家や学者などを生業とする傍ら、「道楽としての

『趣味』』として『変態・資料』に関わっていたわけであるから、こうした権威の呼び込みすら自己言及的な戯れだった可能性が高い。だからこそ誌面にはいっさい「ルビ」が存在する必要がなく、またドイツ語やフランス語をそのまま参考文献として羅列することができたのだ。これも同人が正統アカデミズムと対等に渡り合っている存在だったことを物語っている。

4-5 「〈領有〉の共同体」—④コミュニティ意識の形成

ここまで、① オーソドキシシーの価値転倒を企てた「領有」の実践(4-2)、② そのコミュニケーションを正当化する為に、前提として「教養主義」的エリートの価値体系を理解していることを明記する振舞い(4-3)を確認してきたが、これらは「会員制」のメディア特性を上手く利用して成立したものであった。また、会員制頒布という流通システムを活かすことで、納本を回避し過激な表現を求める読者のニーズに応えられただけでなく、全国の好事家の集う「場」を提供し、珍書を買いたいという同人の利害も実現することができた。たとえば、次のように誌面を利用して会員読者から珍品の譲渡を求める同人も存在した。

【引用⑭】

珍書譲り受けたし：世の中は広いやうでも狭い、また狭いやうでも広い。何か面白い珍書奇書御所時の方で、一度同人等の目をタンノウさせてやらうという云ふ特志があつたら、どうかお貸し願ひたい。またさう云ふ方で御不用の向があつたらお譲りを願ひたい。(MQ. 1926,9「第一回通信」)

「譲り受けたし」と銘打っていながら「一度

同人等の目をタンノウさせてやらうと云ふ特志」という挑発的な表現をしていることから、[作り手 - 受け手]という関係性より、フラットな「同好の士」のメディアであったことが分かる。

【引用⑮】

性が表象された玩具：「玩具に現れた性の研究」の緒言でも御断りした通り、目下私は蒐集並に研究中であります故、若し会員読者の内に性の表象された玩具か或ひは文献でも御持合わせの方がありましたら拝見させて頂き度く存じます。(MQ. 1927,8: 46)

【引用⑯】

心中を扱った資料：私は目下日本の心中を集大成しやうと心掛けつゝ(…)もし会員の方の中で、心中を取扱つた書物、又は錦絵御所時の方がありましたら、一時お貸し下げくださることは出来ないでせうか。(MQ. 1927,9: 62)

以上の【引用】⑭、⑮、⑯のテキストから、会員読者が〈変態〉的資料や珍品を所有しているということを前提として、誌上のコミュニケーションが繰り広げられていたことが分かった。それは梅原北明が創刊号の「第一回通信」で「本誌は元来同人が各自の研究を発表するのが主眼だが、それではネタ切れになつても困るから、有志の方はどしどし寄稿して貰ひたい。本誌の愛読者なら、諸氏もたゞの鼠ぢやあるまい」(MQ. 1926,9: 117)と記したことに象徴的である。このように、同様の「領有」を行う好事家の間でコミュニティ意識が形成されていた。事実、第2号以降で会員から同人へ珍書奇書が贈呈されていることが分かる。

【引用⑰】

東京南千住の河津廣吉氏より多年小生の探し求めてみた「法医学大成」全部の寄贈を得た。これは同氏より頂戴した「東京バック」と共に感謝の意を評して置きたい(MQ.1926,10:「編集後記」) /◇次に、今度も又、河津廣吉氏より、「東洋奇術新報」及び「智慧の庫」等の古い雑誌を戴いた。感謝に堪えない。又、新潟圈三條町字日吉町の佐藤橘四郎氏よりも「秘伝新和巻ノ二」「江戸表珍説」等の珍書の御寄贈を受けた。かたぢけなく頂戴しておく。(MQ.1926,11:「編集後記」)

このように実名を挙げることで会員読者の間にヒエラルキーを演出することができた。同様の演出には、「会」にふさわしくないと見なされた会員を「除名」処分し罵倒するという公開処刑的なものもあったが、いずれもメンバーの凝集性を高めることに与したのである。それは発禁必須の内容を扱う特殊風俗雑誌ならではの「秘密の共有」による「秘密結社的性格」(米沢・城 1999, 2001, 2002)を現している。

こうしたフラットな関係性であったために、時には雑誌に投稿する「会員読者」が「同人」へと昇格することも珍しくはなかった(【引用⑱】)。

【引用⑱】

本号に「詩歌に現れた女陰礼讃」を執筆された佐藤紅霞君、および其の道の大家として好事家に有名な白井鐵太郎くん、この二名を改めて本誌の同人となつて貰つた。(MQ.1926,10:「編集後記」)

「其の道の大家として好事家に有名」という箇所からは、第一にかれらが好事家を自称して

いたこと、第二に好事家のネットワークが形成されていたことも窺える。以上、【引用】⑭、⑮、⑯、⑰は[会員→同人]へ奇書珍品の譲渡を願うものであったが、反対に雑誌を通じて同人が会員に珍品を提供することもあった。創刊号では「グロツスの禁止画集を取寄せてあげます」として珍書の中継ぎ事業を行っている。

【引用⑲】

変態画家ゲオルゲ・グロツス氏の問題の禁止画集エクセ・ホモ(この人を見よ)を獨逸から特に取寄せてあげます。この画集は既に諸氏も御存知の如く、素晴らしい皮肉に富める猥褻画として本国の獨逸でも当局が発売頒布を禁止した程(…)但し、エクセホモの如何なるものであるかを未だ御存じ[ママ]でない方には御取次ぎすることを避けませう。(…)これは珍書蒐集家なら既に誰方も御存じの筈ですから。(MQ.1926,9:50)

この【引用⑲】からは、第一に『変態・資料』が単なる資料集として以上に、貴重な洋書など珍品の通販カタログないし【誌上の即売会】としての役割も果たしていたこと、第二に「獨逸から特に取寄せ」ることができる国外出版界との人脈がある(と会員に示している)ことが分かる。だがこれだけではない。

第三に、「既に諸氏も御存知の如く」、「如何なるものであるかを未だ御存じ[ママ]でない方には御取次ぎすることを避けませう」、「珍書蒐集家なら既に誰方も御存じの筈」といった語り口には「反 - 教養主義」的な「教養」ないしエリートイズムがにじみ出ている。さらに、「素晴らしい皮肉に富める猥褻画として本国の獨逸でも当局が発売頒布を禁止した」ことを、ポジティブな価値として読み替える様子も読み

取れる。

そもそもドイツは〈変態〉の本流でもある。性の精神病理学者クラフト＝エビングの『サイコパシア・セクシャリス（性的精神病理）』が『色情狂編』として明治27年に日本語訳され発禁に合い、1913年に『変態性欲心理』として再度出版されたことが、日本に〈変態〉概念が普及する大きなきっかけとなった。エビング受容の当初は日本に〈変態〉概念が存在しておらず、それは精神病理学的側面を置き去りにしたまま、なし崩し的に「大正・昭和初期の特殊風俗文献の世界で昇華」（秋田 1994: 10）されたのだった。

「グロツスの画集」は、前節で引いた「丸善等で取り寄せてくれる様な本」の対極にあり、前述の「教養主義－丸善－丸善等で取寄せてくれる様な本」に対して、「反－教養主義－会員制雑誌－グロツスの画集」という図式が強調されているのである。教養書や洋書、芸術書という正統文化を提供する「場」としての「丸善」に対して、公に書店に並ぶことがない出版物は会員制雑誌の「誌上」をその代替物とした。

このように、「同人－会員読者」は「反－教養主義」というエートスをもとに、価値体系を共有する「〈領有〉の共同体」として凝集性を高めていった。同人は誌面を【誌上の即売会】ないし「書店」としても機能させることで、会員読者の「会」に対するコミットメントと参入の動機付けを確保することができたのである。

4-6 考察

以上、誌面のテキスト分析を通じて得られた考察をまとめよう。まず、『変態・資料』の誌面から、教養主義の価値体系においては「悪趣味 bad taste」と見なされる対象に価値を見出し、知的な対象として読解する好事家の

「領有」が確認できた。この実践は bad taste を「anti-taste」として読み替える営みであり、教養主義的な価値体系に拘泥する学歴エリートに対して卓越化する【形式】的なゲームであったと考察した（〈4-2〉）。また、アンチ・オーソドキシシーの立場を象徴するものとして、第一に〈変態〉概念が、第二に「発禁」という制度的裏付けが利用されたことも明らかにした。〈変態〉はその【内容】が重要なのではなく、卓越化の資源として利用しうる【形式】上の重要性が仮託されていたのである。また「反－教養主義」というポジションを明確化する上で「公権力／お役人」との対立を意味する「発禁」も有益な資源となった（〈4-3〉）。

ただし、こうした「領有」のゲームがエリート層内部の階級内卓越化として機能するためには、かれらが教養主義的エリートの価値体系に則った「審美眼」ないし「教養」を保有しているという前提が必要であったことも指摘した。この前提をもって、はじめてそこから“ずらす”という振舞いが「役割距離」的に機能し、卓越化として正当化されたからである。そのために「丸善／外国書籍」を教養主義の象徴として誌面に登場させたり、立身出世ルートに乗ったエリートが自分たちの雑誌を評価していることなどを明示する必要があった（〈4-4〉）。

これらの振舞いは階級内部の卓越化を企図するという意味で「taste」と密接に関わるものであったが、同時に「領有」の作法をもって「道楽としての『趣味』（= hobby）」を共有する仲間意識を形成したという点では「hobby」の観点からも理解すべきであろう。それは、誌面が公刊できず書店に並ぶことがない奇書・珍書を売買する【誌上の即売会】ないし【誌上の書店】としても機能し、全国の変態好事家や珍書蒐集家らを集わせ、交流させる「場」の役割を果た

したことに関係している。これは、会員の実名明記や会員切りといった仕掛けとともに、会員読者の「会」への参入動機を確保し凝集性を強化したと考察した（〈4-5〉）。

5 結論

本稿は冒頭で引用した今東光の述懐を手掛かりに、教養主義の言説空間における「反 - 教養主義」的な卓越化の【形式】に着目して分析を行ってきた。ここでは最後に、再び今の告白に立ち戻り本稿の結論としたい。冒頭の引用は次のように続いた。

これは僕が自信を喪失したからであつたらうか。川端の文壇登竜という道は、現世出世の大道のような気がし、僕は浮き世の巷路を歩く人間のような気がして、とんと筆は進まなかつた。(…) どんな時代が来ても、と言うことはどんな事態が起こっても、文学は消滅するものではなく、人間が生き続ける限り文学は絶えず生きる糧に違いないと思うと、僕は『新思潮』を忘れるためにお啓という年上の淫売婦に会いに浅草に行った。(今 1978: 316-317)

今がここまで「新思潮」にこだわりをみせたのは、そもそも「新思潮」自体が「アンチアカデミー」として発足した成立を知っているからであり、それがいつのまにか帝大文科系のメンバーに占められていく中で「エスプリが次第に失われ(…)権力に附着しては当初の革命的な意義が喪われると断じたから」(今 1978: 289)である。つまり〈非 - 教化型〉から〈教化型〉メディアへの転換に疑問を感じていたのだ。しかし、「新思潮」が歴史と伝統に輝く文壇の登

竜門であることは揺るぎない事実であつた。今は、「新思潮的なもの」への憧憬と反発を共に抱きながら〈除け者にされたらどうするか〉と煩悶していた。この煩悶こそ、戦前期の教養主義空間の産物であり、エリート層の多様性を示すものである。

関東大震災が発生した1923年、菊池寛は『文藝春秋』を立ち上げ、さらに横光利一、川端康成らは翌年『文芸時代』を創刊する。「菊池寛の後塵を拝するのを好まなかつた反逆児今東光」(瀬沼 1976: 13)は、双方から脱退し金子洋文らと雑誌『文芸』を創刊して叛旗を翻した¹⁹。『文芸』には「文芸市場」という欄があり、それが後の雑誌『文芸市場』の由来だとされている。創刊者の梅原北明は『文芸市場』の執筆陣に「村山知義・金子洋文・今東光・佐々木孝丸・井東憲といった異色の新鋭文学者」(城 1965: 132-133)を迎え、その後、仲間内から文芸資料研究会を発足し『変態十二史』シリーズを刊行。そのヒットを機に『変態・資料』を生み出したのだった。

こうした歴史的な背景を踏まえても、冒頭に引いた今東光の「僕の文壇 / もっと違った異人種」の姿は『変態・資料』に集った「好事家」という〈オルタナティブ・エリート〉の姿と重なりあう。それは「新思潮を忘れる」ために「年上の淫売婦に会いに浅草に行った」という今の記述にも現れている。すなわち[新思潮—帝大エリート—教養主義]に[淫売婦—僕の文壇—反教養主義]を対置させる「領有」である。これも、bad taste を anti-taste に読み替える「反 - 教養主義」的なエリートのエートスが存在していたことを例証する。

すでに竹内(2003)が指摘したように、修養主義の「農村的でバタ臭い」エートスは、教養主義にも通底しており、両者は「顕在動機が

人格主義であり、潜在動機は立身出世主義（竹内 1997）である点で共通していた。しかし、教養主義空間は、現世的な「立身出世＝ホンネ」（川端の文壇登竜という道－現世出世の大道）を「人格陶冶＝タテマエ」でひた隠しながら「大衆」を嗤うという暴力性を孕んでいた。他方で、自らを偽悪的に好事家と位置づけた一部のエリートは、こうした権威主義的教養主義者の欺瞞を〔浮き世の巷路〕から討ったのである。以上、本稿は【1】エリート内部に「反－教養主義」的な立場によって階級内卓越化を企図した層がいたこと、【2】その営みは、戦前期の①立身出世という価値観、②その系譜としての教養主義の言説空間、③それが生み出した「道楽としての『趣味』」を嗤う風潮、④それを読み替える価値体系を共有する「場」としての雑誌メディア、という諸々の社会的コンテクストが可能にしたことを明らかにしてきた。

これは教養主義の素材、つまり【内容】ではなく、卓越化ゲームの【形式】を重視した〈オルタナティブ・エリート〉の姿を指摘したという点で、従来の教養主義研究とは立場が異なる。同時に、本稿によって得られた知見からは、従来のモダニズム研究や猟奇・変態研究が〈変態〉の【内容】に固執してきたために、それが教養主義における形式的ゲームのツールとして、互換性が高い概念であったことを看過してきた可能性も出てくる。本稿が明らかにした事象は、冒頭に記したとおり吉本隆明による丸山眞男批判などへと連綿と受け継がれ、反復されてきたものの起源としても位置づけられるだろう。

最後に『変態・資料』以降の歴史的な展開を確認しよう。日本では1929年から32年にかけて「エロ・グロ・ナンセンス」が一世を風靡した。1920年代半ば頃、〈変態〉を卓越化の

ための【形式】的ツールとして利用したエリート層の意図に反して、〈変態〉は大衆化し、「エロ」や「グロ」として骨抜きにされていった。そこには、〈変態〉を「文献」や「資料」として領有しようという意識や、権威主義的教養主義者への卓越化の意図もない。より過激な図画や、より煽情的でエロティックな表現が要求された。例えるならば、「国禁の書という事実」への興奮（【形式】）から、「好色本だから性的に興奮」する（【内容】）ことへの転換が生じたのだ。こうした1930年代から戦時期に至る流れを考える上でも、本稿の分析は一つの視点を提供するだろう。同時に、戦時期から戦後にかけての好事家的エリート層の動向や「教養主義」自体の変質など、歴史的展開を他のメディアや文化現象、諸外国の動向にも敷衍しつつ追尾することが今後の課題である。

注

¹ 以下を参照（蔵原 1947；遠藤ほか 1955；丸山 1964；佐藤 2002；竹内 2003；長谷川 2003）。

² ブルデューの「界」や卓越化の理論を援用した分析は現在でも趣味研究やファン研究の周辺で活発化しているが（南田 2001；金田 2007；歐陽 2008；塩谷 2012）これらの研究は階級の再生産というよりも、特定の資本を掛金として闘争する空間としての「界」に重きを置いている。こうした研究ではセルトーやスタンリー・フィッシュの「解釈共同体」概念なども援用されている。

³ これについては佐藤（2013：16-23）も参照。また、堀口剛（2008）も同様の問題関心のもと優れた分析を行っている。堀口は岩波文庫が戦時期にどのように領有されたのかに着目し、教養主義的態度を取る政治的無関心層に加え、日本の精神を獲得しようとした層にも「古典を紹介する」メディアとして岩波文庫が受容されていたことを明らか

にした。「岩波臭＝岩波文化」という論調が忘却してきた「岩波文化」の別様のあり方を呈示しており、「岩波 / 講談社」図式を批判的に検討する上で重要な視点を提供している。

⁴ プルデュエは「界」の作用から生み出された文化的な生産物が「まず第一に階級内の諸集団のあいだで、そして次に諸階級のあいだで卓越化の道具として差異化的に機能する」(Bourdieu [1979=1990]: 358) と述べたが、本稿が扱うのは前者の階級内集団の卓越化実践にあたる。

⁵ 大宅壮一は1929年の『中央公論』で谷崎潤一郎のエロティシズムを「ノーマルではない(…) 変態的な性的関係」に興味を持っていると述べ、里見弴を「社会的な変態性欲」と言うならば谷崎は「生理的変態性欲」を描いていると対比した(大宅1929: 133-135)。

⁶ 日本における「趣味」概念の受容は寺田(2012)、周東(2011)、井村(1998)、神野(1994)などを参照。特に taste から hobby への意味の拡張については(井村1998)を参照。

⁷ 「刊行」ではなく会員限定「頒布」という体裁をとり、奥付には「(非売) 巷の売品と同視する勿れ」と記され「巷の売品」との差異が強調されている。

⁸ 『変態・資料』の発禁状況については「1928年6月まで21冊を刊行するが、そのうち1927年4、6、7、8、9、10月号、1928年2、3、4月号の9冊が「風俗」項目で発禁処分となった」(島村2006: 633-4)。同内容は小田切・福岡(1965)の発禁年表からも確認可能。

⁹ R, シャルチエ(1992)、Chartier(1997=2000)に加え北田暁大(1998)、宮下志郎(2002)を参照。

¹⁰ 「密猟」概念については、とくにCerateau(1980=[1987]2005: 340-1)に詳しい。

¹¹ 田中卓也(2013)、嵯峨景子(2011)、今田絵里香(2007)、川村邦光(1993)、本田和子(1990)などを参照。

¹² シャルチエのアプローチは「ある特定の読者共同体が、ある歴史的な時点において、みずからが領有するテキストにかんしてあたえる固有の用法や意味作用を、はっきり把握すること」(シャルチエ1992: 11)にある。また〈領有〉概念は、「読者たちによってなされる把握、理解のずらし、覆しが、多元性をもちうる」ものであり、「かれら〔読者たち〕を束縛しようとする幾つもの拘束にたいし、それらを審判する能力がつねにある」(シャルチエ1992: 21)ことを示す概念であるとしている。同時に「読者が所属する『解釈共同体』に固有の規則は慣例によって読者に押し付けられる限界」(シャルチエ1992: 22)について否定するわけではないという。本稿が「〈領有〉の共同体」と表現する際、「領有」という実践自体が特定の読者共同体を前提とする時点で語義が重複している印象を与えかねないが、本稿では「共通の価値やコードを利用して——意識的に——オーソドキシシーの価値転倒を試みる」ための意図的な実践として、〈領有〉の【形式】に着目するために、あえてこう表現した。

¹³ 一見すると円本批判のように見えるが、時系列としてこの広告が掲載されたのは円本が企画された以前であることから、円本の前史としての大量生産型の出版傾向を批判しているのが妥当である。1925年発行の『朝日年鑑』では「書物の洪水はずつと前年より引つゞいて日々出版される数は更に多からうかと思はれる」(1925: 536)と「書物の洪水」状態を記している。また『文藝春秋』は『変態十二史』シリーズ刊行以前から雑誌『文芸市場』において岩波、講談社に加え、とりわけ菊池寛が批判されていることから窺える。

¹⁴ 北明については秋田(1994)、城(1965, 1966)、鹿野(1973)、斉藤(1956)、虫明(1962)、鹿野(1973)、梅原(1978)、菅野(2005)、山口(2005)、島村(2006)、佐々木(2007)が詳しい。

¹⁵ 以下『朝日年鑑』(1927: 306)および同前(1928:

595) 参照。

¹⁶ 記されている肩書きの真偽について全て検証することはできないが、性科学者の羽太鋭治らは他誌においても文芸資料研究会同人との交流が観察できるために信憑性は高い。

¹⁷ 「稲穂実る頃」(MQ.1927,10: 115) を参照。

¹⁸ 「丸善」が事実として教養主義を象徴するものであったかは議論の余地があり、「丸善」自体はより多様な様相を呈していたと考えられる。しかし、

好事家集団が殊更に教養主義の象徴として、つまり仮想敵として「丸善」像を仮構している様子が重要である。

¹⁹ 今東光が『文党』を立ち上げた経緯は【引用①】で論じた「内容 / 流通形態」双方への二段階のアンチテーゼ、とくに「内容以上に価値づける」という言い回しが『文藝春秋』批判であるという考察を正当化する。

文献

秋田昌美, 1994, 『性の猟奇モダン——日本変態研究往来』青弓社.

Bourdieu, Pierre, 1979=1990, *La Distinction: Critique Sociale du Jugement*, Editions de Minuit. (=石井洋二郎訳『ディスタクシオン——社会的判断力批判I・II』藤原書店.)

Chartier, Roger, 1997=2000, Roger Chartier et Gulielmo Cavallo dir., *Histoire de la Lecture dans le Monde Occidental*, Seuil, Paris. (=田村毅ほか共訳「読書と『民衆的』読者——ルネッサンスから古典主義時代まで」『読むことの歴史——ヨーロッパ読書史』大修館書店.)

遠藤茂樹・今井清一・藤原彰, 1955, 『昭和史』岩波新書: 89-90.

Goffman, Erving, 1961=1985, *The Studies in the Sociology of Interaction*. The Bobbs-Merrill Company, Inc., (=佐藤毅訳『出会い——相互行為の社会学』誠信書房.)

長谷川一, 2003, 『出版と知のメディア論——エディターシップの歴史と再生』みすず書房.

本田和子, 1990, 『女学生の系譜——彩色される明治』青土社.

堀口剛, 2008, 「戦時期における岩波文庫の受容: 古典と教養の接合をめぐって」『マス・コミュニケーション研究』(72): 40-57.

一花健蔵, 1927, 『昭和三年朝日年鑑』朝日新聞社.

今田絵理香, 2007, 『「少女」社会史』勁草書房: 135, 189.

井村彰, 1998, 「TASTE と HOBBY——日本における趣味概念の変容」『美学』, 1998, 49(3): 34.

神野由紀, 1994, 『趣味の誕生 百貨店がつくったテイスト』勁草書房.

城市郎, 1965, 『続・発禁本「キタ・セクスアリス」から「ファニー・ヒル」まで』桃源社.

——, 1966, 『禁じられた本』桃源社.

鎌田敬四郎, 1928, 『昭和四年朝日年鑑』朝日新聞社.

金田淳子, 2007, 「マンガ同人誌——解釈共同体のポリティクス」佐藤健二・吉見俊哉編『文化の社会学』有斐閣.

菅野聡美, 2003, 「変態研究序説——大正日本の性と政治」『年報政治学』2003, 5: 139-60.

——, 2005, 『〈変態〉の時代』講談社.

鹿野政直, 1973, 『大正デモクラシーの底流“土俗”精神への回帰』日本放送出版協会.

- 川村邦光, 1993, 『オトメの祈り——近代女性イメージの誕生』 紀伊国屋書店.
- 北田暁大, 1998, 「『観察者』としての受け手: ルーマン・社会システム論的視座からの、「メディア論」および「メディア・リテラシー」概念の再検討」『マス・コミュニケーション研究』(53): 83-96.
- 今東光, 1978., 『十二階崩壊』 中央公論社.
- 蔵原惟人, 1947, 「文化革命と知識層の任務」『世界』6月号.
- 丸山宏, 1994, 「明治期における朝顔雑誌の創刊とその展開」『造園雑誌』57(5): 31-6.
- 丸山眞男, 1964, 「日本ファシズムの思想と運動」『現代政治の思想と行動』 未来社.
- Michel de CERTEAU, 1980, L'invention du quotidien. 1. Arts de faire, U.G.E., coll.10/18. (=山田登世子訳, 2005, 『日常実践のポエティーク』 国文社.)
- 南田勝也, 2001, 『ロックミュージックの社会学』 青弓社.
- 宮下志朗, 2002, 「ロジェ・シャルチエを読む方法」『書物史のために』 晶文社.
- 虫明亜呂無, 1962, 「転換期の風流——エログロ文化の創始者・梅原北明」『思想の科学』 昭和37年11月号.
- 永嶺重敏, 2001, 『モダン都市の読書空間』 日本エディタースクール出版部.
- 小田切英雄・福岡井吉, 1965, 『昭和書籍 / 雑誌 / 新聞発禁年表(上)』 明治文献.
- 大宅壮一, [1929]1981, 「日本エロチック作家論」『大宅壮一全集』1巻(『中央公論』 昭和4年8月号初出.)
- 歐陽宇亮, 2008, 「文化消費の圏域としての「場」の完全性——美少女ゲームという「不完全な場」を例として」『現代社会学理論研究』2: 141-55.
- R. シャルチエ著, 福井憲彦訳, 1992, 『読書の文化史 テクスト・書物・読解』 新曜社.
- 嵯峨景, 2011, 「『女学世界』にみる読者共同体の成立過程とその変容——大正期における「ロマンティック」な共同体の生成と衰退を中心に」『マス・コミュニケーション研究』2011, (78): 129-47.
- 斉藤昌三, 1956, 『三十六人の好色家——性研究家列伝』 創藝社.
- 佐々木宏明, 2007, 「文芸市場社以前の梅原北明」『初版本2』 人魚書房.
- 佐藤卓己, 2002, 『「キング」の時代——国民大衆雑誌の公共性』 岩波書店.
——, 2013, 『物語 岩波書店百年史2「教育」の時代』 岩波書店.
- 瀬沼茂樹, 1965, 『本の百年史 ベストセラーの今昔』 出版ニュース社.
——, 1976, 「解説」『復刻版 文芸市場』 日本近代文学館.
- 島村輝監修, 2006, 『「変態・資料」解説』『変態・資料』第5巻, ゆまに書房.
- 塩谷昌之, 2012, 「鉄道ファンの社会学——「ゲーム」としての鉄道趣味に焦点を当てて」 東京大学大学院人文社会系研究科修士学位論文.
- 周東美材, 2011, 「書物のなかの令嬢: 『趣味大観』にみる昭和初期東京における音楽」『昭和紀要』35: 57-78.
- 竹内洋, 1997, 『立身出世主義——近代日本のロマンと欲望』 日本出版放送協会.
——, 2003, 『教養主義の没落』, 中央公論社.
- 寺田貴雄, 2012, 「近代日本の音楽教育言説にみる taste としての「趣味」」『北海道教育大学紀要』63(1): 141-50.
- 田中卓也, 2013, 「戦後における『少年倶楽部』の誌面構成と読者の様相」『共栄大学研究論集』(11): 121-38.

- 筒井清忠, 1995, 『日本型「教養」の運命——歴史社会学的考察』岩波書店.
梅原正紀, 1978, 『近代奇人伝』大陸書房.
和田桂子編, 2006, 『変態心理学』『コレクション・モダン都市文化 変態心理学』, ゆまに書房.
山口昌男, 2005, 『挫折の昭和史 <下>』岩波書店.
米沢嘉博・城市郎, 1999, 『別冊太陽 発禁本—明治・大正・昭和・平成』平凡社.
———, 2001, 『別冊太陽 発禁本Ⅱ 地下本の世界』平凡社.
———, 2002, 『別冊太陽 発禁本Ⅲ』平凡社.

(おおび ゆうこ 東京大学大学院 yuko1811+research@gmail.com)

(査読者 芳賀学、宮台真司)

“Distinction Strategy” of Dilettantes and “HENTAI” in Early Showa Era:

Focusing on the Contents of Magazines, "MATERIA QURIOSA"

YUKO OBI

This paper aims to clarify the ethos of “Anti-Culturalism (Han-Kyouyou-shugi)” of certain group of Japanese prewar intellectual class elites who called themselves dilettantes and the background of them. They replaced “bad taste” as “anti-taste” sophisticated culture and appreciated it exclusively through some media such as magazines which were not for sale but distributed to only subscribers. We considered this reading pratique as appropriation. In this paper, we discuss their attitude about appropriation through analyzing contents of the magazines, “MATERIA QURIOSA (HENTAI-SIRYOU 1926-1928)” which was distributed by “BUNGEI SIRYO KENKYU KWAI” by Readers Community (Interpretative Community) Studies. Since “HENTAI(QURIOSA)” discourse was used as a multi-sense word in the 1920s Japan, dilettantes could conveniently use this concept for “Distinction Strategy” by appropriation. The paper summarized that dilettantes’ reading pratique of appropriation was the game of distinction for academic elites who intended to differentiate themselves from the masses. Furthermore, it examined that such attitude identified them (created a sense of fellowships) as “Community of appropriation”, and strengthened cohesion of the gathering (Kwai).